

Y10-12

院内看護研究発表会におけるシンポジウムの効果

大津赤十字病院 看護部

○伊富貴初美、廣原 恵子

【はじめに】院内看護研究発表会の活性化のために、新企画としてシンポジウムを提案した。脳死後臓器提供に関わる看護について考える機会を提案した。今回シンポジウム参加者の感想から、看護を共有することの効果を実感したので報告する。

【目的】看護実践を共有し、日々の看護を振り返る機会とし、今後の看護に生かす。

【活動報告】H24年度院内看護研究発表会において、「脳死後臓器提供患者・家族の意思の尊重と医療者のジレンマ」をテーマとしたシンポジウムを企画した。シンポジストとして、主治医、救急病棟、集中治療室および手術室の看護師と院内コーディネーターの5名を招いた。主治医は、病状と臓器提供を決定された経緯や経過および思いを語られた。看護師は、それぞれナラティブ形式で発表し、院内コーディネーターは、脳死移植医療についての説明と摘出チームとの関わりを説明された。アンケートにシンポジムに参加した感想を記載するようにした。

【倫理的配慮】院内看護部倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】シンポジウム参加者は、看護師140名、看護師経験14.3年であった。回答率67.6%であり、126個の逐語録をカテゴリー化した。結果、『看護師としての自分を見直す機会』『情報共有・他職種との交流の場となるシンポジウム』『移植医療を考える機会』『医師・看護師・院内コーディネーターそれぞれの葛藤』『尊厳を大切に看護』『役割の発揮』が抽出された。

【考察】シンポジウムを開催することは、『看護師としての自分を見直す機会』となり、『尊厳を大切に看護』を行っている施設の看護やチーム医療を実感できたと考える。

【おわりに】シンポジウムは、自らの看護を振り返る機会となり、看護を共有できる場となった。

Y10-14

旭川赤十字病院における初期研修医入職時研修、5年間のあゆみ

旭川赤十字病院 教育研修センター

○渡邊 明彦、大友 友子

【はじめに】当院では、ガイダンスを兼ねて、4月初めに全職種新入職者対象の研修会を4日間程度で実施している。それに加えて、初期研修医(以下研修医)に対しては研修医対象プログラムを行っている。今回は、平成21年度から25年度までの期間における研修会実施状況の変遷と、研修医対象プログラムに対して研修医が行った評価結果を併せて報告する。

【研修内容】14月初日より、3-4日間の全職種対象研修(座学中心)を実施。2.それと並行して、研修医対象プログラムを3日間で実施。3.研修医対象プログラムの内容は、座学および短時間の参加型プログラム。4.さらに、全職種対象プログラムが終了した後、2日間のコメディカル部門(薬剤部、放射線科、臨床検査科)研修。5.4月中旬に、新入看護師対象の注射・採血実習へ参加(1日)。6.5月以降に、ICLS講習会へ参加(1日)。研修医からの評価は、それぞれ4項目について5段階評価で行った。

【結果】全職種対象研修の内容は年々増加傾向にある。また、研修医対象プログラムに対する研修医の評価は座学で低く、感染対策やコメディカル部門研修、注射・採血実習などの参加型プログラムで高かった。また、座学であっても、アニメーションなどで研修医を飽きさせない工夫が盛り込まれているプログラムに対する評価は高かった。

【今後の課題と展望】全職種対象プログラムの内容増加に伴い、ガイダンス期間の延長が今後予測される。しかし、その主体である座学に対する研修医の評価は低く、またガイダンス期間の延長に伴い研修医の診療科への配属が遅れると、研修医のモチベーションを維持する方策が必要になる可能性がある。今後、重複する研修内容の解消や、他の研修病院でも実施している「体験入院」など参加型プログラムの導入などを検討している。

Y10-13

フルマッチを目指して 臨床研修事務担当者の役割

石巻赤十字病院 人事課¹⁾、石巻赤十字病院 総務企画課²⁾、石巻赤十字病院 救命救急センター³⁾

○大向 紀江¹⁾、阿部 雅昭¹⁾、関本麻衣子²⁾、石橋 悟³⁾

石巻赤十字病院は、医師不足が深刻な東北地方で唯一、平成18年から7年連続でフルマッチを続けている。地方の一中規模病院にすぎない当院が、全国規模のマッチングで医学生から選ばれるために重視してきたことは、現役の研修医が満足して研修していなければ次の研修医は来ない、つまり、「研修医が研修医を呼ぶ」ということである。そのため常に、研修医にとって魅力ある研修を提供するとともに、このことを全国に向かって積極的に発信してきた。そして、このような取り組みに事務職員が積極的に関わっている。人事課が臨床研修に関わる全ての窓口となっており、課長と教育研修係の専従事務職員1名が担当している。事務担当者として考えていることは、現状の研修体制の分析と改善、そして有効なアピールである。具体的には、1) 気軽に意見や要望を出してもらうために、研修医が話しやすい環境をつくり、研修に反映させられるようにしている。2) 研修内容の陳腐化を防ぎ研修体制を充実させていくために、全国の臨床研修関係者と人脈をつくり、先進的な取り組みなどの情報収集に努めている。3) 当院の臨床研修を全国の医学生に知ってもらうために、広報担当者や連携した効果的な広報活動を積極的に行っている。また、医学生の口コミも重要な広報ツールであり、レジナビや病院見学に訪れた医学生には、臨床研修の窓口として良い印象を持ってもらうことを心掛けて対応している。医学生は臨床研修病院を選ぶにあたって、指導体制や研修プログラムを重視している。フルマッチを目指すためには、研修医が満足できる研修体制の構築と効果的な広報活動が必要であり、臨床研修を担当する事務職員の役割が重要であると考えられる。

Y10-15

整形外科初期研修を考える～研修医・整形外科医にとって理想の研修とは？

武蔵野赤十字病院 整形外科

○守重 昌彦、山崎 隆志、森田 友安、望月 義人、早川 恵司、寺山 星、原 慶宏、小久保吉恭

【はじめに】平成16年から施行されている初期臨床研修制度では整形外科は必修科目ではない。当院でも選択科目であるが、比較的多くの研修医が選択している(平成23年度研修医では10人中7人、平成24年度では一年目終了時点で9人中6人が選択)。しかし平成23年度研修医では初期研修終了後に整形外科を進路に選んだ者は1人もいなかった。進路としない整形外科研修に何を求めているのか?どのような整形外科研修を提供すべきなのかをアンケートをもとに考察する。

【対象と方法】対象は平成23年度採用、24年度採用の研修医計20人ならびに整形外科常勤医9名である。質問内容は研修医に対しては選択した理由、研修を受けてよかった点、研修後に救急外来での不安が減ったかなどである。整形外科常勤医に対しては研修医に期待すること、研修医が何を求めていると感じているか、当科での研修での改善すべき点などである。

【結果と考察】アンケート回収率は研修医14名74%、整形外科常勤医9名100%であった。研修医が整形外科を選択した理由は、進路の候補33%、自分の進む科に役立つ25%(救命科、小児科、膠原病科)、プライマリケア・救急外来が必要が92%であった。当院では一次救急の初期対応が研修医であり、整形外科救急患者が内科、小児科に次いで3番目に多いことが選択率の高さの一因と考えられた。しかし、研修後救急外来での不安は88%が減ったと回答したものの解消したとまで感じるものはいなかった。常勤医の78%が整形を回ることで志望科にしてほしいと期待していた。以上からプライマリケア対応を重視しつつ、それ以外の整形外科の魅力を知ってもらうためのシステム作りが必要であることが分かった。